



Data

監督・脚本：安藤桃子
 原作：安藤桃子『0.5ミリ』（幻冬舎文庫刊）
 出演：安藤サクラ／津川雅彦／草笛光子／柄本明／坂田利夫／織本順吉／木内みどり／土屋希望／井上竜夫／東出昌大／ベンガル／角替和枝／浅田美代子

👁️👁️ みどころ

今や老人介護は日本国最大の社会問題だが、自らその体験者である安藤桃子が芸達者な妹・安藤サクラを「おしかけヘルパー」に起用して監督すると、何とも面白い人情ドラマに！

今ドキ、「冥土の土産におじいちゃんと寝てあげてくれない？」の誘いに乗る若い娘はいないだろうが、安藤サクラが男版「フーテンの寅さん」・サワを自然のままに(?)怪演！

人間も物事も善と悪とは隣あわせで、マルかペケかは紙一重。一見ハチャメチャで法律違反スレスレのサワの行動にハラハラしながらも、本作全編を通してサワが見せる総合的な「人間力」に拍手！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■安藤姉妹に注目！怒濤の196分にどっぴり！■□■

姉は映画監督として『カケラ』（09年）でデビュー。妹は『風の外側』（07年）に続く『愛のむきだし』（08年）（『シネマルーム22』276頁参照）で大注目。2人とも急成長期にある、そんな安藤桃子・サクラ姉妹が、はじめて196分という長尺の映画に挑戦！

原作は、安藤桃子が実際に祖母の介護をしていたという体験に基づいて書い





た小説『0.5ミリ』。しかし、桃子が本作に登場させたそれぞれのワケあり老人たち、すなわち①派遣先の寝たきりのおじいちゃん・片岡昭三（織本順吉）、②カラオケ店とホテルを混同する老人・康夫（井上竜夫）、③駐輪場の自転車をパンクさせまくる老人・茂（坂田利夫）、④女子高生の写真集を万引きする元教師

の老人・真壁義男（津川雅彦）は、すべて桃子の想像力から生まれたキャラだ。

他方、『愛のむきだし』でゼロ教会の女性幹部・コイケ役を「怪演」したサクラが、本作では「フーテンの寅さん」を彷彿させる、何とも魅力的な「おしかけヘルパー」役を見事に演じている。満島ひかりとともに、若手ながら演技力には定評のある安藤サクラは、『かぞくのくに』（12年）では『シェーン』（53年）の名シーンと同じように後々まで語り継がれる別れのシーンを見事に演じていた（『シネマルーム29』86頁参照）。そんなサクラが本作では「家ナシ、金ナシ、仕事ナシ」ながら「愛すべき、はた迷惑・山岸サワ」というキャラに挑戦！へタをすると最近バカ売れの黒川博行の小説『後妻業』の主人公や、夫を青酸カリで毒殺した容疑で逮捕され、現在警察で取り調べを受けている笥千佐子のよ



うな「悪女」と誤解されそうな(?) すれすれな行動には、弁護士の私としてはハラハラさせられるが、そこはサクラの天然キャラによる人の良さや桃子の巧みな演出もあり、見事に女版「フーテンの寅さん」になりきっている。

そんな安藤桃子・サクラ姉妹に注目。そして怒濤の196分にどっぷりと!

■マルかペケかは紙一重! そのスレスレ感に拍手! ■

12月2日に公示された第47回衆議院議員総選挙の選挙戦が始まった。そこではいつものように「〇〇がマルで、△△がペケ」という二者択一方式で、自分の陣営に有利な主張ばかりが見られるが、それはナンセンス。また、TV『報道ステーション』のニュース・キャスター古館伊知郎の「解説」も「弱者の味方」視点ばかりで、いい加減ハナについてくる。しかし、30歳をわずかに越えただけながら、さすが映画俳優の奥田瑛二とエッセイストの安藤和津の長女で、酸いも甘いも噛み分けた(?) 映画監督・安藤桃子は、本作のヒロインとなる「おしかけヘルパー」のサワにそんな単純な役は押し付けないから、お見事。

古館流に解釈すると、そもそもサワが派遣先の寝たきりのおじいちゃん・昭三の娘・片岡雪子(木内みどり)から、「冥土の土産におじいちゃんと寝てあげてくれない?」と言われて、それを承諾すること自体が違法でダメなこと。ところが本作ではサワが、「お母さんのオッパイが恋しいおじいちゃんと添い寝するだけなら・・・」「派遣元に内緒にしてもらえたら・・・」等の条件で、それをオーケーしてしまうところが面白い。もっとも、寝たきりのおじいちゃんとはいえ、「その方面」の欲望にいったん火がつくと、石油ストーブをひっくり返すほどのパワーになり、2階を火事にしてしまうという大事件に発展してしまったから、アレレ・・・。その結果、サワは刑事裁判の被告人とはならなかったものの、「家ナシ、金ナシ、仕事ナシ」のヘルパーになってしまったから大変だ。

さらに、サワがカラオケ店とホテルを混同している老人・康夫に近づき、一緒に部屋に入るのも、かなり詐欺的。また、駐輪場の自転車をパンクさせまくる老人・茂や、女子高



生の写真集を万引きする元教師の老人・義男の「おしかけヘルパー」になる「きつかけづくり」は、本作を観ている限り「脅迫」そのものだ。したがって、これも古館流解説では「最近の若い女の子は恐いですね・・・」などというバカみたいなものになってしまうはずだが、さすが安藤桃子監督の演出は面白い。人間観察とコトの善悪の判断は、このように善と悪の両面をちゃんととらえなくちゃ・・・。

■□■なぜサワを手放したの？長く重宝すればいいのに！■□■

康夫とのカラオケ店での出会いは一時的かつ一晩こっきりのものだったが、そこでは別れ際に康夫の口から何度も出る「ありがとうね」の言葉が印象的だ。さらに、別れの握手の際、サワの手に残る折り曲げられた1万円札もおしやれだし、サワの背中にコートをかけてあげる



シーンもよくキマっている。他方、一人暮らしの老人のクセに（なればこそ？）必死に気張って生きている茂のキャラは破天荒。しかし、盗んできた自転車を一緒に返すサワとのチームプレイは絶妙だから、この2人のコンビは永久に続くのでは・・・？そう思っていたが、茂は結局貯め込んだ大金をボーンとはたいて介護ホームへの入居を決めたから、残念ながらサワとの別れが・・・。しかし、ここでもサワは茂が大切にしていた「いすゞ17クーペ」をプレゼントされたほどだから、茂のサワへの感謝の気持ちがいかに大きかったかがよくわかる。ちなみに、後にトランクの中から発見された「あるもの」にサワは大号泣することになるので、それにも注目。

私のもっとも残念に思うのは、家に入り込んだ動機は脅迫的かつ犯罪的だが、せつかく義男の家の中でサワはなくてはならない存在になったのに、義男の姪・真壁久子（浅田美代子）が家に戻ってきたことによって、サワがおしかけヘルパーを自ら辞めること。それまで義男の家に入っていたヘルパーの浜田さん（角替和枝）の評価によっても、毎日の食事の世話から寝たきりの妻・静江（草笛光子）の世話まで、ヘルパーとして完璧かつ理想的な仕事をしているサワを、義男はなぜ手放したの？久子が帰ってきてても、お金の余裕が十分あることは明らかなのだから、義男はなぜサワを引き留め長く手元に置かなかったの？

本作中盤に見る、おしかけヘルパー・サワの奮闘ぶりを見ていると、「私ならこのヘルパーは死ぬまで手放さないぞ！」と強く思ったが、さて、周りを見渡すと、こんな優秀なへ

ルパーが現実存在するの・・・？

■□■あのマコト君が再登場！アレシ・・・■□■

今ドキは、老人の介護問題と共に、青少年の引きこもりや不登校問題も深刻になっている。映画冒頭でサワが出火騒ぎを起こしてしまった片岡老人の家には、引きこもりで不登校、そのうえ口も利けない片岡雪子の一人息子・マコト（土屋希望）が住んでいた。しかし、サワに「冥土の土産におじいちゃんと寝てあげてくれない？」と頼んだ雪子は、マコトを成し遂げた（？）後に首つり自殺を遂げてしまったから、火事事件の他にも、それを目撃してしまったサワはホントに大変だった。冒頭のそんなストーリーは、サワが警察から無事釈放されたところでジ・エンドだと思っていると、本作ラストには、再びマコトと今はマコトと一緒に生活している父親の佐々木健（柄本明）のストーリーになっていくので、それに注目。



「家ナシ」のサワは茂老人からもらった車の中で時々寝ていたが、ちょっとした悪事を働いているマコトを目撃したことによってマコトを脅かし、再びマコトの家に案内してもらおうという筋書きはいかがなもの？こりゃいくら何でも偶然が重なりすぎだ。また、いくらマコトが「普通ではない」としても、健老人の住んでいる廃屋の2階で間仕切りもないままマコトと共同生活をするのは、いくら強気のサワでも無理なのでは・・・。

■□■マコトへのサワの寄り添い方を、あなたはどうか解釈？■□■

そんな思いでそのストーリーを観ていたが、安藤桃子監督が描くサワのエネルギーと生命力は私の想像をはるかに超えていたようだ。酒を飲むと凶暴になる健は、ある日暴力的にマコトの髪の毛を切ろうとしたが、そこに割ってはいるサワの奮闘ぶりはお見事。今の日本社会では「君子危うきに近寄らず」がベストだから、こんなところでサワが健とマコトの問題に立ち入って武勇を奮っても仕方ないはず。しかし、自分自身も「ワケありの身」であることが一目瞭然のサワは、目の前で起きるそんなトラブルを放っておけなかったのだろう。

もっとも、桃子監督も、こんな底辺で生活している健とマコトの生活を、こちらも「家ナシ、金ナシ、仕事ナシ」のサワが解決の処方箋を示すことなどできないことはわかっている。したがって、以降展開していくストーリーはTV『報道ステーション』の古舘伊知郎キャスターがいつも言うような、理想的解決



になるものではない。もっと言えば、私にはサワが雪子から昭三と寝る時のために着せてもらった赤いワンピースをマコトに着せてやるシーンや、マコトがそれを着て雪子を懐かしんでいるシーンを観ると、かなりの違和感をおぼえてしまったが、多分これが桃子流のマコトへの寄り添い方なのだろう。サワとマコトがそんな中で見せる「爆発シーン」をしっかり考えながら、2人のこれからの生き方を見守りたい。

それにしても今日の映画館は8割ぐらい観客が入っていたから上出来だが、その9割以上は70歳以上のじいさん、ばあさんばかり。ホントはサワちゃんくらいの若い人こそ、この映画を観ているいろいろと考えてほしいのだが……。

2014（平成26）年12月5日記

